

3 「家庭教育支援活動」部会

◆第1回部会

期 日：平成23年6月17日（金）

会 場：大津合同庁舎 5E会議室

出席者：千原委員（部会長）、谷口委員
富岡委員、平尾委員、堀出委員、山田委員

事務局：県生涯学習課（3名）



（第1回部会）

1 開会

- ・県生涯学習課 挨拶

2 協議

（1）委員紹介

（2）滋賀県における家庭教育支援関連事業の概要について

「家庭教育支援事業の概要について」の説明（担当より）

- ・みんなで支えるきめ細やかな家庭教育・語り合いを通じた親育ちの活動
- ・滋賀県家庭教育協力企業協定制度 ・「早寝・早起き・朝ごはん」県民運動

（3）文部科学省補助事業「家庭教育支援活動」事業について

「学校・家庭地域の連携による教育支援活動促進事業について」の説明（担当より）

- ・3つの活動について（持続可能な支援のための地域人材の養成、家庭教育支援チームによる相談対応や保護者支援、保護者への学習機会や親子参加行事の企画、提供）
- ・県内市町の取組について

（4）家庭教育支援の推進について（意見交流）

【主な意見】

（保護者について）

- ・保護者だけで子どもを育てられるものではない。一緒に考えていく姿勢で取り組みたい。
- ・保護者自身が「ここに生まれてよかった」という思い、自尊感情をもってもらいたい。
- ・保幼小中の子育てのなかで、親自身が育つものである。
- ・学校で子どもが学んできたことを親がひっくり返す現実がある。
- ・PTA子育て学習会では、親同士が自分の生き立ちを語り、子育てを真剣に語っていた。お互いに共感を得られて帰られた。
- ・最近は親同士で子育てについて話す機会が少なく、語り合う中で、子育てについて実は同じようにみんなが悩んでいることを知り、安心したと言って涙を流した人がいた。大切なキーワードは話し合うことである。
- ・他人に認められていないと感じている親が多い。できる人と比較するのではなく、できるところをほめていくことが大切である。
- ・新興住宅では、つながりがない中で、安心して子育ての相談ができる場所を求めている。
- ・メールアドレスをお互いに交換しながら友達となっている保護者が多い。
- ・妊娠出産が低年齢化しており、定職に就けなく転居を繰り返すため、行政の支援から外れていくことがある。

（地域との連携について）

- ・子どもを中心に、親や学校だけでなく、近所の人間の顔が見える地域社会をつくり直すことが大事である。
- ・「地域が家庭を育てていく、子育ては個々の親だけではできない」ということで「親の会」を作った。
- ・昔は、地域の中で自然に大人が子どもに話しかけ、大人同士、大人と子ども 子ども同士の関係性があった。地域のコミュニティがあれば家庭教育はそんなに難しくない。
- ・知らない人には話してはいけないという風潮がある。

（企業との連携について）

- ・企業として学校支援センターに登録し、働くことの講演や子どもとなるべくふれ合うことで、企業として教育の一環に貢献している。

- ・大型ショッピングセンターでは、企業と大学、NPOが連携して子育て支援をしている。年間の登録者数、利用人数も多く、遊ぶだけでなく、赤ちゃんマッサージ、公民館を借りてクッキングをするなどを行っている。お弁当をもってくる母親が何組もある。

(持続可能な取組に向けて)

- ・平成21年度委託事業「訪問型家庭教育相談体制充実事業」では、2チーム(西浅井、長浜)が活動し、それぞれ独自の取組をしていたが、その後、委託事業がなくなり、市町の担当者も代わり合併があり、行政とコミュニティとのパイプがなくなった。支援チームとしては活動をしているが、中心に活動する人への負担が大きく、現状は厳しいとのことである。
- ・補助金や組織があるときはよいが、なくなると残念な状況になることがあるが、一方で、地域のかも育ちつつあり、ボランティアも育ちつつある。
- ・学校支援ボランティアに多くの方が登録しており、絵本の読み聞かせや裁縫、園庭の環境美化などを行っている。夫婦でケーキ作りを教えているが、親と子どもを巻き込んで何かすれば、親育てにつながっていく。
- ・コーディネーターは、今年から地元の間人が行っている。学校に行きたいと思っている地域ボランティアの人は多く、子どもたちも学校に来る地域の人から声をかけてもらおうと喜んでいる。
- ・ボランティアが子育て経験を生かし、喜んで学校に行くことが大事である。
- ・本事業で大事なことは持続可能なシステムをつくることで、細く長く取り組むことが重要である。

(福祉部局との連携について)

- ・就学前の親がストレスを感じながら、周りの人とつながりのない方への支援が課題となっている。
- ・子育てサークルにも参加できない人にどのように支援をすればよいか。
- ・孤立し、つながれていない保護者に支援の輪を広げて、それでも入ってこれない人をどうするかが課題である。
- ・親が子育てをできなくなった子どもへの支援も重要である。

(子どもについて)

- ・チャイルドライン(子ども専用電話)では、実施時間中は電話が鳴りやまない。多くの子どもたちが、生の人間の声を求めて電話をかけてくる現状がある。
- ・いろんな大人からほめられたり(怒られたり)することは大事なことである。
- ・パトロールの時、挨拶をしても返さない子どもが多い。地域とのつながりが薄いような気がしている。挨拶やコミュニケーションが必要である。
- ・家庭の教育やしつけは子どもの行動に表れている。

3 連絡事項

(1) 今後の部会の予定について

(2) 平成23年度指導者等研修会について

第1回 7月22日(金) 9:30~12:00 会場: 県庁新館7階大会議室

内容: 三部会合同研修 講師: 村田 和子氏

第2回 10月予定

内容: 合同研修会(家庭教育支援活動部会と合同)

第3回 1月27日(金) 内容: 事業成果報告会(三部会合同)

4 閉会

- ・県生涯学習課 挨拶

◆第2回部会

期 日: 平成23年11月24日(火)

会 場: 近江八幡市教育委員会

出席者: 千原部会長、谷口委員、平尾委員、山田委員、堀出委員

事務局: 県生涯学習課員(4名)

現 地: 近江八幡市教育委員会 西川生涯学習課長、野村参事、安部主査(3名)

近江八幡市家庭教育コーディネーター(6名)

1 開会

- ・千原部会長 挨拶

2 現地研修

(1) 近江八幡市における家庭教育支援活動の現状と課題について（野村参事）

- ・近江八幡市家庭教育基盤形成事業として、学校支援地域本部事業を実施している小学校に家庭教育支援コーディネーターを配置し、学校と家庭、地域を結ぶ活動をしている。
- ・近江八幡市家庭教育推進協議会を設置し、提言をもらい、コーディネーターの活動に活かしている。

(2) 本事業受託市町への視察についての報告（担当より）

- ・甲賀市（子育て、親育ち講座）、・日野町（家庭教育支援チームによる出前講座）
- ・近江八幡市（コーディネーター養成講座）・竜王町（教育フォーラム In 竜王）

(3) 近江八幡市家庭教育支援コーディネーターとの意見交流

【主な意見】

（コーディネーターについて）

- ・学校支援地域本部事業を実施している小学校に家庭教育支援コーディネーターを配置し、学校と家庭、地域を結ぶ活動をしている。
- ・常に教頭先生と相談し、学校行事と連携し、気づいたことを学校に相談している。
- ・コーディネーターの役割としてタテ・ヨコ・ナナメの関係づくりをしている。情報係として小中の連携にもあたっている。
- ・小学校では、読み聞かせとPTAの取組として通信等で発信している。
- ・子どもを育てるために自分たちの地域にはこんなことがある、「こんな人がいる」、「こんな環境がある」という、その地域の強みを活かして活動をしている。
- ・学校支援コーディネーターと家庭教育支援コーディネーターを兼ねていると、学校支援センターの活動などをうまく活用できる。
- ・コーディネーター自身が、柔軟に役割を考え、活動している。
- ・コーディネーターの選任は、学校間の課題がそれぞれ違うので、学校ごとに選任している。
- ・コーディネーターが増えることで、保護者は安心できるようになる。
- ・地域や保護者は学校に直接言えないことがあるので、コーディネーターはそのクッション役になり、学校と地域、保護者をつなぐことができる。その点からもコーディネーターを兼務する方が良い面がある。



（現地意見交流会）

（保護者について）

- ・コミュニティセンターを中心に子育て講座、講演会をしている。保護者会などには出席する人と出席しない人がはっきり分かれている。
- ・夫婦で子育てについての価値観の違いや祖父母との子育て観の違いなどで、お母さんが孤立して、子どもにあたってしまうことがあり、リラックスできる場で、「ママ友」同士で話をしてもらい、「来て良かった」と言ってもらっている。
- ・主任児童員も兼ねている。子育て講演会を実施したが、保護者は、一人ひとり悩みを持っておられた。気軽に相談に来ていただけるよう子育て相談を心がけている。
- ・地域コーディネーターと兼務をしているが、学校行事などへ子育て世代の参加が薄れている。保護者はスポ少やランチなどで学校の情報を交換している。
- ・どの家庭でもしんどい思いはあり、地域の環境を活かして活動している。
- ・三世代の家庭が多い地域であるが、最近、ひとり親家庭が増えている。地域で子育てについて相談できる人がいれば、保護者のストレスの解消にもつながる。

（地域との連携について）

- ・4泊5日の通学合宿を6年間続けており、もらい湯などで地域とのつながりができている。ゲームをしない、テレビを見ない、お菓子も食べない生活であるが、子どもは満足している。県内50カ所ぐらいで実施している。
- ・親子フォーラムで給食を一緒に食べる取組をしており、給食のレシピを配布し、親子で食事をつくる取組に利用している
- ・校区で作った野菜などを提供してもらい、シチューづくりの取組をしている。祭りや音楽の行事

で地域を巻き込んでの活動をしている。

3 部会協議

(1) 事業成果の検証について

- ・家庭教育支援の基礎資料とすることを目的に、事業成果アンケートを近江八幡市、日野町の1小学校、第2学年保護者に実施する。

(2) 今年度の研修について

(3) 意見交流

【主な意見】

- ・保育園等への入園前の段階で参加しにくい家庭への支援が必要であるが、それができるというのはどのようなシステムが必要であるか。
- ・支援の輪に参加しにくい人に対して、どのように働きかけるのか。児童委員という制度があるが、虐待はなかなか表面化してこない。
- ・保護者の悩みが子どもの生活に影響している。
- ・平成21年度の訪問型の事業のときには、全戸訪問という保健師と地域のボランティアが訪問するという取組があった。
- ・どこの市町も何らかの方法で、子どもが生まれたら訪問する事業を行っている。
- ・保育園に入園していない場合は、地域の見守りが必要である。地域との関わりが薄れていることが問題となっている。
- ・虐待などの通報が多くなっているが、なかなか家庭に入りにくいところがあるが、取組を進めることが大切である。
- ・新しくできたアパートやマンションには自治会すら入らないことがある。民生委員に目が届かず、隣の人も通報しない問題がある。転々と転居している家庭もあり、どこからも支援を受けていないという問題が起きている。
- ・虐待の相談件数が多いことは、地域の眼が行き届いているという面もある。地域の意識をどのように醸成していくのかが課題である。
- ・事業などで委員会があるときはよいが、次にどのようにつなげていく継続性の問題がある。
- ・子どもの様子から家庭のしつけの重要性を感じている。参観でも保護者の参加が少ない。
- ・本日、話を聞いたコーディネーターは素敵な方で、いろんな人たちを支えている。
- ・社会の気運を高める取組として、企業のコマースなどの影響も大きい。
- ・家族単位での活動だけでなく、地域で誘い合う雰囲気が必要である。
- ・気運を盛り上げながら、一方ではサポートをするということで、両面で取組ながらそこから漏れている保護者への支援が大切である。
- ・補助事業はいつかなくなるので、そのための今から準備をしておき、持続可能な取組へとつなげていく課題がある。
- ・子どもの泣き声を聞いたとき、人任せにしない地域づくりが必要である。そのような人間を増やしていくことがセイフティネットであり、行政だけでできるものではない。
- ・行政の取組をとおして、地域が力をつけていくということが必要である。
- ・家庭教育支援は、福祉部局と密接に取組む必要がある。
- ・出てきてほしい人に出ていきもらえるように、福祉部局との連携が重要である。
- ・福祉と教育の壁をつくらないで、目配りをする必要がある。



(第2回部会)

5 閉会

- ・県生涯学習課 挨拶

◆第3回部会

期 日：平成24年2月8日（水）

会 場：コラボしが21

【出席者】千原部会長、谷口委員、平尾委員、山田委員、堀出委員（5名）

【事務局】県生涯学習課員（3名）

1 開会

- ・千原部会長 挨拶

2 日程説明

3 協議

- (1) 年度の部会経過および研修内容について（担当より）
- (2) 持続可能な家庭教育支援活動に向けて（福祉部局担当より）

- ・乳幼児全戸訪問事業（「こんにちは赤ちゃん事業」）
- ・「助けてサインを見逃さない地域づくり事業」 ・滋賀県男性の育児休業取得奨励金

【主な意見】

- ・福祉と教育の連携が必要である。どちらかがやればよいというものではない。行政の支援から漏れていく人がいないようにすることが大切である。
- ・家庭教育支援と子育て支援の境目が大切である。保護者に語るときに、家庭教育は家庭に潤いをもたらすものと伝えている。
- ・子育てと家庭教育の認識について、家庭教育という言葉は保護者には一般的ではない。
- ・家庭教育と子育て支援には違いはあるが、一致できる目標や目的を明確にすることで、保護者にもわかりやすくなる。
- ・子育て支援や家庭教育支援の中身は違うが、そこを棲み分けつつ漏れないようにすることが重要である。
- ・福祉は個々のケースを具体的に支援することが重要であり、一方、家庭教育は幅広く、底上げをしていくという点で難しさがそれぞれにある。
- ・教育と福祉が両輪として取り組んでいくことが必要である。
- ・福祉部局の考えや取組を知っておくことは重要である。



（第3回部会）

- (3) 事業成果の検証について

- ・近江八幡市、日野町におけるアンケート調査より

【主な意見】

- ・子育て・家庭教育の充実に必要なものとして、どこの調査でも「子育てや家庭教育についての情報」が上位にあげられる。
- ・人間関係が希薄になっている中、「生」の情報ではなく、ネットなどからの情報で、逆に保護者が悩んでしまうケースがある。
- ・子育て経験者の悩みながら子育てをしてきた話などは、まさに「生」の情報であり、子育てに悩んでいる保護者が聞くことにより、安心できるものである。
- ・個々の情報を保護者がどこから受け取るか、情報の発信の仕方が重要である。
- ・保護者がどのように情報を得ているかについて、掘り下げた問いが必要である。
- ・人と人とがどうやってつながっていくのか、その仕掛けとして家庭教育支援チームに取り組んでいるが、認知度が低いところが少し課題である。
- ・保護者には支援者はわかっていても、コーディネーターという名称では理解されていないこともあり、わかりやすい呼び名の方がよいのではないか。

- (4) 家庭教育支援活動と他の取組との連携のあり方について

【主な意見】

- ・従業員の多くは保護者であり、企業として従業員を支援していく考えを強く持っている。同時に、学校への支援活動をとおして子どもたちの成長を身近な企業として支えていきたい。
- ・生きることは様々な領域に重なることがあり、その重なり合いが大事であり、重なり合ったところで、お互いに信頼感を持ちあって連携することが大切である。
- ・各部会からの様々な課題を聞くことにより、自分の生き方が少し変わる部分があればよい。

4 連絡事項

- ・実践事例集のまとめ方について

5 閉会